

合計32日間の調査期間中、群れの追跡は部分的なものも含めて30日間実施できた。この期間の遊動範囲は23.4 km²に及んだ。このうち約半分の地域は冬期の遊動域と重複するが、中心は東に約2km、南に約1km移動し、冬期の利用が認められない標高400 m以上の地域も含んだ。月別にみると、7, 8, 10の各月は冬期の利用地域にほぼ包含され、9月は冬期利用しない南東部の地域をも利用した。しかし、'85年6月のような標高400 m以上のチシマザサの密生する地域の集中的な利用はせず、利用地域について大きな季節変化は認められなかった。

1日あたりの遊動距離は7月が平均3.9 km、8月が4.9 km、9月が4.2 km、10月が2.7 kmであり、最大は6.1 km(8月)に達した。冬期及び春期の結果と対照すると遊動距離は1, 2月の厳冬期を最小とし、夏期8, 9月を最大とする明確な季節変化を示すことが分かった。

直接観察の結果から食生の変化をみると、7月は木本の新葉と草本類の採食頻度が高かった(比率にしてそれぞれ18.6%、30.2%)が8月から10月はこれに替わり、果実・種子類の採食が大半を占めた(比率は順に60.4%、76.7%、74.7%)。採食物の内訳は月により大きく変わり、例えば9月がクロモジ、オオカメノキの実が優占したのに対し、10月はクリだけで40%の比率を占めた。このような主要採食物の変化は遊動ルートのとり方、距離に影響を与えていると推測されるが、この点を確認するため、今後は採食物のフェノロジー、分布様式を把握する必要がある。

またテレメーターを装着した2個体のうち、片方の入力しか得られない日があったり、互いに700 m離れて泊り場につくなどサブ・グループングを示唆する結果が得られた。さらにM群の遊動域内に別の小群が生息することが確認されており、今後はこのような群れの動態を継続的に押さえる必要がある。

課 題 2

高崎山生息ニホンザルの人工餌場および自然林内における優劣順位に基づく採食量の研究

横田直人・長岡寿和(大分短大・園芸)

これまでニホンザル高崎山群の採食生態について、A群(オトナ雌)を対象に、ランダム個体追跡法により、摂取量・食物種・摂取時間および遊動域の観点から季節性を考慮して調査を行ってきた。1986年には、一日の摂取量 790.7 kcal(自然エサ 296.3 : 人工エサ 494.4)および採食行動の時間的割合24.5%等の結果を得た。

本年度は対象をB群にきりかえ、さらに特定個体に限定して連続観察することにより、より精度の高い採食量値を得るとともに、ニホンザルの社会的順位性に伴う採食状況を明らかにする目的で同様の調査を実施した。そのため6才以上のオトナ雌を優劣順位により9段階に区分したのち、最上位、最下位各6頭に毛染め標識を施した。調査は1987年8~10月、1988年1月の間に月5日単位で行った。また9~10月の期間には、サル寄せ場内において、優劣順位に伴う人工エサ摂取量調査をA・B群各3~4頭、計13個体について行った。その結果、日平均摂取量<自然エサ:人工エサ>は、優位ザルが1,162.5 kcal<456.7 : 705.8>劣位ザルは1,165.1 kcal<680.6 : 484.5>であった。また1分ごとのスキャンニングによる採食行動の時間的割合は、優位ザルが25.6%、劣位ザルが35.4%を示した。これらは日平均観察率(総観察時間÷観察可能時間×100)94%に基づいた優位ザル1頭2日分、劣位ザル3頭6日分相当のデータから推算した値である。食物種は72種あった。

人工エサ摂取について、A群優位ザル:劣位ザルは、684.0 kcal : 418.1 kcal(1.6 : 1)、B群優位ザル:劣位ザルは、736.4 kcal : 307.1 kcal(2.4 : 1)であった。A・B群ともサル寄せ場内のエサ摂取においては、優劣順位性に伴う量的な差をみとめた。

追跡個体選出の際、優劣順位の差を意識的に広くしたため、個体の体重、年令に傾りが生じたことを付記する。今後この点を調整し継続調査する。